



岡市友利先生の大きな足跡を偲んで

広島大学 名誉教授
松田 治

1. はじめに

私がはじめて岡市友利先生にお目に掛かったのは、1960年代の終わりごろである。当時、中野区にあった東京大学の海洋研究所(現大気海洋研究所)で大学院生として過ごしていたが、時には学外の専門家による特別講義を受ける機会があった。ある時、岡市先生が香川大学の新進気鋭の助教授としてこの特別講義を担当され、赤潮の研究や瀬戸内海的环境保全などについてエネルギッシュな講義をされた。

講義の詳しい内容の記憶はすでに薄れているが、今でも良く憶えている点がある。それは、「君たち、現場の漁師さんなどから話を聞こうとしても、初めは相手にしてもらえないんだよ」という趣旨であった。ご自身の経験に基づいた、“信頼関係の構築が大切”という忠告だったと理解している。私は、今でもこの忠告を大切に守っているつもりである。

当時は、日本の高度経済成長期だったこともあり、まさか、自分がのちに広島大学で瀬戸内海を仕事場にすることは夢にも思っていなかった。しかし、縁があって1971年に広島大学水畜産学部(のちの生物生産学部)の水産環境学研究室(のちの水圏環境学研究室)に助手として赴任することとなった。1971年というと、環境省の前身の環境庁が発足した年で、その2年後の1973年に「瀬戸内法」(現在の瀬戸内海環境保全特別措置法)が制定された。環境問題ということばは定着しておらず、まだ公害問題と呼ばれていた時代である。

広島大学で瀬戸内海的环境保全などに携わるようになってから、50年以上が経過した。この間、岡市先生には公私にわたって様々な点でご指導をいただき薫陶を受けてきた。岡市先生の訃報に接し、これまでにいただいたご厚意に感謝し、その巨大なご功績・足跡の一端をエピソードとともに偲びたい。

2 研究プロジェクトの優れたリーダー

岡市先生は様々な研究プロジェクトの優れたリーダーであった。広島大学には豊潮丸^{とよしおまる}という練習船があって、しばしば共同研究にも使われたので、岡市先生をはじめとして香川大学や愛媛大学などのメンバーと一緒に過ごす機会も多々あった。これは、学会などでの関係とは少し異なる、いわば、「同じ釜の飯を食う」関係も生みだしてきたと思われる。

豊潮丸船上で、若いころの岡市先生はエネルギッシュな仕事ぶりが印象的であったが、公務が忙しくなって乗船機会が減ってくると、時折の乗船機会を非常に楽しんでいるように見えた。船上の談論風発では、いつも、アイデアが豊富で、面白そうな話がいつのまにか実現していることも少なくなかった。

ここでは、岡市先生が研究代表者を務められた日本生命財団の特別研究助成、「瀬戸内海における有用水産資源の持続的生産と環境保全に関する学際的研究」(1992年10月—1995年9月)の際の様子を思い出してみたい。ちなみに、この研究の成果は、成書「瀬戸内海の生物資源と環境」(恒星社厚生閣、1996年)にとりま

とめられており、私も分担研究代表者を務めた一人である。

この研究では、豊潮丸による瀬戸内海全域にわたる 4 季の現場調査も実施され、私は全航海に乗船した。各湾灘の観測点で調査を実施すると 1 航海で 10 日以上を要するので、この 4 回の調査だけでも 50 日程度を要する殆ど前代未聞のものであった。学際的研究だけあって、現場調査以外の研究成果も多く、年に一度の成果発表会では熱い議論が延々と続き、予定の時間が不足するのが常であった。このような現場重視の方針や自由闊達な議論の背景には、岡市先生の類まれなリーダーシップがあった。

今でも語り草となっているのは、この学際的研究の最後の成果発表会と「打ち上げ」が、普通の会議場ではなくて有馬温泉で行われたことである。これも前代未聞であるが、単に古き良い時代だから実現できたというよりも、結局は岡市先生の決断によるものであった。「ユーモアを忘れずに、どうせやるなら楽しく」というリーダーシップは、今ではますます貴重である。

3. 瀬戸内海研究会議

私事になるが、私は 2003 年 3 月に広島大学を退官し、英虞湾の自然再生(新たな里海創生プロジェクト)などに携わっていた。大学をリタイアして 2-3 ヶ月したころ、岡市先生から直接電話をいただいた。当時、岡市先生は瀬戸内海研究会議の会長を 10 年ほど務めたところであったが、「瀬戸内海研究会議の会長を引き受けて欲しい」という趣旨であった。身に余る任務と思われたが、断れない雰囲気もあって、「そろそろそういう時期か」と結局はお引き受けすることとなった。

当時、瀬戸内海研究会議は任意団体であったが、NPO 法人化した方が良いという議論が次第に持ち上がってきた時期でもあった。長期間にわたる議論があって話は簡単でなかったが、私が会長を務めた 10 年強の最後に NPO 法人化を実現し、柳哲雄先生に次の理事長を引き継いだ。その柳理事長は 2022 年に急逝され、紆余曲折はあったものの、私が、ピンチヒッターとして図らずも再び代表(理事長)を務めることとなった。この理事長を約 2 年間務めた結果、幸いにも 2024 年秋には岡市先生の教え子でもある香川大学の多田邦尚教授に理事長を引き継ぐことができた。結局、研究会議の代表を 12 年以上も務めさせていただいたのは、岡市先生のおかげである。

4. 国際エメックスセンターと国際貢献

前項と同じような話で、国際エメックスセンター(EMECS)の副理事長についても岡市先生から、直接、お話をいただいた。当時、EMECS の理事長は兵庫県知事で、岡市先生は副理事長であったが、これを引き継いでほしいというものであった。私は、EMECS では理事や科学政策委員会委員などを務めており、また国際 EMECS 会議などでも長年にわたってお世話になってきたので、結局、EMECS の副理事長を引き受けることとなった。これで、前項と合わせて、瀬戸内海研究会議と EMECS の双方で岡市先生の役割を引き継がせていただくこととなったものの、既に両任務は終了した。在任期間中に十分に役割を果たせたかどうかについては内心忸怩たる部分もある。

第 3 回国際 EMECS 会議(EMECS3)が 1997 年にスウェーデンのストックホルムで開催された折には、岡市先生とストックホルムの古い街路を一緒に歩いたこともある。EMECS3 は、ストックホルム・ウォーター・シンポジウムという水資源関係の大きな国際会議と一体化して開催されたので、非常に大規模なものであった。ノーベル賞の授賞式が行われるのと同じ会場で、スウェーデン国王が出席されたレセプションにも参加した。このよう

な稀な機会に、岡市先生と一緒できたのは、今となっては懐かしい思い出である。

岡市先生は、様々な形で国際交流にも大きな貢献をされてきた。岡市先生が中心になって、1987 年に高松で開催した世界初の国際赤潮シンポジウムの折には、「会場のホテルの職員には英会話の研修を受けてもらったんだよ」と嬉しそうに話していた。このような、直接、学術研究とは関係のない部分にも配慮できる懐の深さが、岡市先生の持ち味なのかもしれない。東南アジアのタイに行くと、岡市先生の教え子、かつての香川大学の留学生達が各所に活躍していて、プロフェッサー・オカイチは有名であった。タイでは留学生時代に豊潮丸に乗船した方々と旧交を暖めることができたのも、岡市先生による人材育成の賜である。

岡市先生の国際貢献のユニークな例として、瀬戸内国際芸術祭(「瀬戸芸」)2010 の一環として開催された瀬戸内国際シンポジウム 2010 がある。基調講演／基調シンポジウム(全体会議)が直島で 8 月 6 日(金)に行われ、翌日には、3 つの分科会、①「“食と農”―地域の新しい豊かな生き方」が豊島、②「里海から多島海へ」が犬島、③「ツーリズムの可能性」が小豆島で開かれた。3 日目には分科会報告会／総括シンポジウム(全体会議)が高松で開催された。私は全体会議と犬島セッションと呼ばれた分科会②「里海から多島海へ」に参加したが、分科会ではアジア諸国の若い世代の参加も多く非常に楽しい会議であった。

「瀬戸芸」は芸術祭だと認識している人が多いので、その一環として、このような瀬戸内海や里海に関するシンポジウムが開かれたことはあまり知られていない。しかし、このような企画が実現したのも、シンポジウムの実行委員会委員を務められた岡市先生の懐の深さと広い視野によるものである。

5. おわりに

今回、触れさせていただいたエピソードは、岡市先生が残された非常に大きな足跡に比べると、自分が知っている部分だけに関しても、あまりに「極々一部」であることは痛感せざるを得ない。例えば、豊島の 50 万トンに及ぶ産業廃棄物の不法投棄問題の後始末やいわゆる赤潮裁判など、社会的にも極めて重い課題にも精神的に取り組まれた。山のような 50 万トンの廃棄物の現場を岡市先生に案内していただいたこともある。何しろその守備範囲が広大なのである。

岡市先生のような大きな存在が亡くなられた後には、我々よりもさらにずっと若い世代がその役割を担ってゆくのが望ましいのであろうが、実際には極めて難しい。個人でその役割を担えるような人材は容易には見当たらない。現在あるいは将来的に瀬戸内海が抱えている課題の解決も簡単ではない。どうしたらよいかといえ、一つは岡市先生の優れた点や岡市先生から学んだ点を、各人が少しずつでも活かしてゆくことではなかろうか。

岡市先生は、少年時代から青年時代を第 2 次世界大戦中や戦後の混乱期に生きた戦中派と呼ばれる世代である。終戦直後には身体を病んで、島根県や広島県で養生されていたことがあるとも伺った。大変な時代を過ごされたことは間違いないが、そのような影を感じたことは一度もない。いつも前向きで明朗である。これが、普通の人と違うのは、多分、それが「筋金入り」だからではなかろうか。

このような勝手な考えに対して、岡市先生はきっと、「そんなこと言われてもねえ」と苦笑されているに違いない。何度か連れていっていただいた高松の酒席「たん熊」での笑顔が思い出され、できればまた乾杯したい気分である。心からご冥福をお祈り申し上げたい。合掌。